# JŌMON

01 | 2021.7

Jomon Art and Culture Foundation
News and Voice

対談「それ、[縄文]だよね」
片桐仁×茂呂剛伸

縄文太鼓の2020年／これから

縄文芸術文化財団 ニュース&ボイス 新装刊

縄文芸術
文化財団

# 響き渡る縄文の音色とリズム

代表理事
**横内 龍三**

2019年(令和元年)10月に、それまで任意団体として活動を続けて来た茂呂剛伸さんの「縄文太鼓」の活動が、新設の「一般財団法人・縄文芸術文化財団」に引き継がれ、茂呂剛伸後援会の会長を仰せつかっていた私が新設法人の代表理事に就任いたしました。この間、茂呂剛伸後援会の会報は第1号から第9号まで発行されましたが、組織の法人化に伴い会報も「縄文芸術文化財団ニュース&ボイス」と装いを改め、今般その第1号が発行される運びとなりました。

私の「茂呂さん及び縄文太鼓」との出会いは、2013年(平成25年)3月に開催された「北海道・北東北の縄文遺跡群の世界遺産登録をめざす道民会議」(略称・北の縄文道民会議)の席上で披露された茂呂さんの演奏に大変感動した時に遡ります。縄文太鼓の音とリズムが私の体全体を強く揺さぶり、まるで縄文の人々と一体化するような「命」の力を感じました。演奏会以外でも、小型の縄文太鼓をもって2018年(平成30年)9月に北海道150年事業の一環として赤煉瓦庁舎前で行われた100名の大合奏(写真右下)に参加したことなどが懐かしく思い起こされます。

この間、茂呂さんは常に新しい芸術・文化の創造を目指して活動をしてこられました。思いつくままに並べますと、ピアノとの協奏、コンテンポラリーダンスとの共演(札幌時計台ホール「思考の響界」「盲目のサロルンカムイ」)などの試みをはじめ、演奏の場も北海道を出て、東京、出雲大社『平成の大遷宮』での演奏、パリ公演など着実に広がって参りました。こうした新しい芸術の創造という精神は、お弟子さん方にもしっかりと受け継がれています。本会報でも紹介されていますが、例えば、石田しろさんは、アトゥイさんが主宰するアイヌ詞曲舞踊団〈モシリ〉の公演に参加されています。昨年9月に弟子屈町屈斜路湖畔で開催された第21回絶滅種鎮魂祭の公演は正にアイヌ民族が醸し出す幽玄の世界に私共を引き入れるものでした。さらに、佐藤夕香さんは、さまざまな舞台でいろいろなジャンルの芸術家と共演され、活動の幅を大いに広げておられます。

ところで、北海道にとって縄文時代とは如何なる時代であったのでしょうか。日本列島に人が棲み始めたのは今から約4万年前(旧石器時代2万5千年)、その後、土器の制作が始まった縄文時代が1万5千年続き、弥生時代が始まったのは約3千年前とのことです。そこで、日本列島の人類の4万年間を1年に例えると、12月第1週に縄文時代が終わり、12月15日に弥生時代が終わるという計算になるようです。明治の始まりは、12月31日、即ち明治維新から現代までは僅か24時間あまりに過ぎません(北の縄文文化を発信する会編「縄文人はどこから来たか?」国立博物館人類研究部・篠田謙一氏講演より)。さらに、北海道には弥生時代がなく、縄文時代から続縄文時代、(オホーツク文化)アイヌ文化の時代へと移って参ります。縄文時代は北海道にとって特別な意味を持つことが分かります。

本年夏頃には、北海道・北東北の縄文遺跡が世界文化遺産に登録される可能性が出てまいりました。世界は今、新型コロナウイルスのパンデミックに晒されており、芸術活動全般に大きな支障となっておりますが、去る4月10日には、NHK総合TVの「おはよう北海道・土曜プラス」で、茂呂さんの「縄文の音」が取り上げられました。

こうした困難な状況下にあっても、茂呂さんと門下の皆様の「縄文の音とリズム」が、全国にそして世界に一段と強く響き渡っていくことを大いに期待しております。

# 一人ひとりの縄文文化

**理事**
**石森 秀三（北海道博物館長）**

私は世界の諸民族文化を研究する民族学（文化人類学）を長らく専攻し、かつてオセアニアのミクロネシア（旧南洋群島）で民族学的調査を行いました。その際に「縄文文化」のことをいつも意識していました。私は1978年～1980年にかけて2度に亘って、ミクロネシアのサタワル島という小さな珊瑚礁島でフィールドワークを行いました。日本からグアム島経由でヤップ島まで飛行機で飛び、そこからは500トンぐらいの貨物船に乗って、荒波の太平洋を10日間ぐらい航海して、ようやくサタワル島に行き着きます。この島は電気も水道も便所も無い、近代文明から隔絶された「絶海の孤島」でした。当時の人口は約500人、男性はフンドシ一本、女性は腰布一枚を身にまとい、ココヤシの葉葺の土間の小屋で暮らしていました。主食はタロイモ、副食は魚類、家畜はブタ・ニワトリ・イヌでした。

資源の乏しい島ですので、島人は互いに助け合い、分かち合いながら暮らしていました。例えば、魚の取れ高の少ない時には高齢者と子どもだけに分配し、普通程度に取れた時に成人女性にも分配します。成人男性は海に潜って魚を取りますが、魚の分配は最も少ないわけです。前近代文明の暮らしなので「物の文明」は貧弱の極みでしたが、その代わりに互いに分かち合い・心配り合いに満ちていて「心の文明」はとても潤いがあって豊かと感じました。

私はこの島に約1年間滞在し、フンドシ一本で島人と暮らしを共にして、キリスト教改宗以前の伝統的な世界観・宇宙観のことを調べ、帰国後に『危機のコスモロジー：ミクロネシアの神々と人間』という本を1985年に出版しました。そのため私なりにサタワル島での暮らしの経験を通していつも「縄文文化」のことをあれこれと考えています。

江戸時代後期の旅行家・博物学者であった菅江真澄（1754年生～1829年没）は、日本各地を旅行中に縄文土器らしき物を見つけて記録として書き留めています。すでに考古学者の関根達人氏が「菅江真澄が描いた『縄文土器』と『土偶』」と題する論文を発表しています。明治に入って、1877（明治10）年に来日した米国の考古学者エドワード・モースは大塚貝塚の調査で「縄紋」を持つ土器を発見して、「縄文考古学の幕を開けた」と言われています。

「芸術は爆発だ」で有名な前衛芸術家の岡本太郎氏（1911年生～1996年没）はフランス遊学後、1951年に東京国立博物館で縄文火焔土器を見て「心身がひっくり返る衝撃」を受けました。岡本氏は「伝統的な日本の美」とは異質な「縄文の美」に衝撃を受け、縄文土器を通して縄文人の世界観を読み解こうとしました。岡本氏は縄文火焔土器を通して「心眼（しんがん：物事を見分ける鋭い心の働き）」によって「縄文の美」を見出したのかもしれません。

北海道文化賞や札幌市民芸術賞を受賞しておられる原子修氏（1932年生まれ）は詩人、劇作家、札幌大学名誉教授で縄文文化に関心が深く、「縄文の夜明け」「縄文の花」などの詩劇を生み出しておられます。原子氏は10数年前に茂呂剛伸氏によるジャンベ（西アフリカの太鼓）の演奏を聞いて、「あなたの太鼓は縄文の音がする」と指摘されたとのことです。原子氏の鋭い指摘に刺激を受けて、茂呂氏は「縄文太鼓」の創作を思いついています。原子氏は茂呂氏の太鼓演奏を「心耳（しんじ：心の耳、心で聞くこと）」で聞き、「縄文の音」を感じとったのかもしれません。

「北海道・北東北の縄文遺跡群」の世界文化遺産登録が間近に迫ってきました。これまで「縄文文化」というと生活の三大要素である「衣食住」を中心に解明されてきました。「衣食住」は重要ですが、「遊」という生活要素もまた大切です。いま日本の至る所で縄文ファンや縄文女子が様々なかたちで縄文の「遊」を想像しながら楽しんでいます。コロナ禍で一挙に近代文明の危機が明らかになっています。今こそ縄文太鼓の響きを聴きながら、それぞれなりに「縄文の遊」に想いをめぐらせ、それぞれなりにライフスタイルを再考する絶好のチャンス到来かもしれません。

対談

# それ、「縄文」だよね

# すべては『好き！』からつながっている

## 片桐仁さん×茂呂剛伸

コメディアン／俳優
粘土造形作家

司会・撮影・構成　ウリュウ ユウキ

## 本物に触れること、そして「守破離」の心

**・・・2019年11月に「JOMON+ART village in Niseko 2019」にご出演いただいた片桐さんは、コメディアン、俳優、そして展覧会を開き著書を出される粘土造形作家としてもご活躍されています。片桐さんからは本当に"好き"というものが公私ともににじみ出ているというイメージがあります。**

**片桐仁さん**　すごい多彩と言われるんですが、全然そんなことないと思うんですよ。器用にやる、マルチに活躍すると言われるけど、そんなにいろいろできないですね。

1996年に芸能界の仕事を「ラーメンズ」として始めた一方で、美術大学の出身だったので造形も何かできないかなとは思っていたんですけど、プラモデルが好きだったので、その延長で小物を作ったり途中でやめたりみたいな感じの期間が何年かありました。ありがたいことに雑誌連載がやらせてもらえたんですよね、1999年くらいから。それでこういうものを作りたいとかはあるけど、そこからどうなりたいとかっていうのはあまりないまま、締め切りが毎月来てって感じで作品が溜まっていく状態だったんですけど、ラーメンズの地方公演をする時に、縄文の遺跡があちこちにありますから、そこに何かがあるんだなと。でも東京国立博物館の土偶展ですかね、最初に本物を見たのは。僕は土偶を見てて、西洋彫刻とか日本の仏像とかとは全くルールが違うんだけど多分細かいルールがあるんだろうな？あと、かわいいなとか。造形として、縄文土器ほど訳がわかんなくないですか？何かどうなっているんだろうなと。

その後2010年に青森県に呼んでもらって、三内丸山遺跡とかあちこち回っていく時に、自分の連載も兼ねて、粘土で合掌土偶と遮光器土偶、板状土偶の三つをベースにして作品を作りました。またその前に縄文Tシャツ展というのがあって、十日町（新潟県）の国宝の火焔型土器を模写してTシャツにしたんですけど、その時にそれをアレンジしようと思ったらできなかったんですよね。凄すぎた。やっぱりそれを一生懸命見たら、全然わかんないですね。だから、本物を見ないとわからない。アーティスティックに特化したすごい人が各時代ごとにいて、一点もののすごいやつって印象があるんですけど、でも多分何百年にもわたって火焔土器が作られていたとか言われると、そうか、土偶をキャラクターとして見ていた現在の僕らからすると、もうあれも目的とか理由があって、例えば作る工程からなにかあるんでしょうね、宗教的なものとか。だからそういうのを見たりいろんなお話を聞いていくうちに、数千年前に同じ日本人が作ったんだなっていうのが実感できたのかもしれないですね。

その後長岡の馬高縄文館でのワークショップで作ったんですけど、作ってからもう一回本物の火焔土器を見たら、もう今までと見え方が変わったんですよね。もっと前に言うと2005年に唐津に取材に行った時に窯元で作っていると、なんとなく頭の中でずっと土器にはなってたんですけど、でも頭の中で一生懸命やろうとしても、全然それになってなくて、あれ、なんないなと思うんですよ。

だから頭の中でイメージしての縄文土器と本物って全然違う。その何年かで実際に本物を見ながら作る体験をしないとわからなかったってことから、いろんな人とつながったりいろんなものを見るっていう行動に結びついていきました。

**・・・本物に触れるっていうことが重要なのですね。**

**茂呂剛伸**　私は小さい時に和太鼓のプロの演奏を聞いて、太鼓が歌って踊ってるように感じたんですよね。これが本物か、プロってすごいなっていう印象を受けて、もっと知りたくなったんですよね。

**片桐**　火焔式土器も土偶たちもいろんな地域で、1人の人が全部作ったわけじゃないですよね。

**茂呂**　最初は真似だと思うんです。守破離という言葉があるんですけど、守って、その型を破って、そこから新しい展開をする。かつ土器や土偶を作るのって衣食住とは関係のないところなので、常にコミュニティ自体で理解があって、尊敬を集めるすごい作り手がいて。何人もですね。師匠というか巨匠が。

**片桐**　今と変わらない技術伝承のあり方があったと思うんですね。ちょっと変わってたらいろいろあったでしょ、地域ごとにね。

**茂呂**　そうですね。風土からインスピレーションを受けて造形に反映されていると思っています。そして、今、日ごろいろんなところで聞かれる「サステナブル」。

**片桐**　サステナブル？

**茂呂**　継続（持続）可能。地球全体でもそうだけど、地域での継続であったり、あと、表現者・アーティストとしても環境や

**かたぎり・じん** … 1996年 小林賢太郎さんと「ラーメンズ」を結成。現在は演技の分野にもフィールドを広げると共に、粘土造形から縄文文化にも造詣を深め"ペットボ土偶"などユニークな解釈を加えた作品を創作している

イマジネーションも含めて自分としての継続可能を、縄文に絡めて最近考え始めています。今縄文に大事なのは、みんなに好きになってもらって知りたいっていうふうに思ってもらい、保存していくにはみんなに理解をいただくことだと感じています。

**片桐**　長岡に行った時に、火焔型土器を大きさ重さ完全に同じものを3Dプリンターで複製して、それを持って保育園とか幼稚園に行ったんですけど、「持てる」ってのは大きいかなと思って。3Dプリンターは各国にあるわけだから、データで送って出力してもらって「こういう物です」っていうのは魅力的だなと思います。今、行けないんだとしたら。いろんなしがらみはあるでしょうけどね。

**茂呂**　例えば国宝とか重要文化財を運ぼうと思ったら大変じゃないですか。それにあれは立体なので、持ってもらわないとわからないですよね。

**片桐**　重さ・大きさ・無茶苦茶さ。なるほど人が作りしものだな、と。やっぱりあの本物が持つ、厚み、表面の感じとか、それを見ながら作るのが一番わかるんですね。

**茂呂**　さすが作家ですね。作る各工程がわかっていないとそこは見て解けないですよね。

**片桐**　そうなんです、面倒くさいんです。あれはすごいな。どれにも当てはまらない。なんで弥生以降には継承してなかったんだろうと思うんです。厳しい時代になってたとか、寒くなってたとか言いますけどね。

**茂呂**　北海道では弥生文化がなく、そのまま続縄文文化につながっていくんですね。津軽海峡を米の稲作文化が越えられなかった。

**片桐**　米が作れたら弥生が来た。

**茂呂**　寒くて米が作れないというように、北海道自体は独自の生態系であったり、そもそも昔は大陸がつながっていて、マンモスをシベリアの方から追って人が入ってきたと言われていて。

**片桐**　本州から上がってじゃなくて上から下がった感じで、上からも来ているんですね。

**茂呂**　縄文時代って、土器は生活用具として使ったものもあるけど、土偶なんてまさにお腹の足しにならない。やっぱり心の足し、心の栄養になったというようなところで。集合意識、そこに住んでいる人たちの意識を集める装置だったのでしょう。その一つが造形美であったり。そういうものが終わって、稲作文化になるとそれが急になくなってるんですね。

**片桐**　土器もツルツルになって、縄文を「やめよう」って言ったんじゃないでしょうかねぇ。

**茂呂**　縄文人のDNAは現代の日本人にも入っていて、アイヌの方と琉球の方によりそれが濃く残っているということがわかって、日本人はどこから来たのかっていう中で、縄文土器や土偶から、1万年も人と争わない、人を殺めるような武器も大量虐殺も遺物からは見つかっていない、そこにどんな豊かな文化があったのかを一つのモデルとして発信していくことが重要と思っています。守破離の"守る"、師弟関係で技術を覚える。逆に言うとそこに自分を出してしまうとあまり良くない。自分が表現者としてやりたいとかこうしたいっていうのはやはり"破る"時に必要じゃないですか。そして"離れる"となると、継続するために周りが理解してくれる哲学的なもの、ここととは違うんだっていうコンセプトワークが必要になる。環境も含めて縄文自体にもこういう造形美があったってことは、そういうことをちゃんとやっているんですよね。

## わからないながらも進む、だから、見えてくる

**・・・好きでいられる理由を、茂呂さんが「守破離」とおっしゃって、片桐さんも「本物を見ないとわからない」、と。それはすごく大きいと思います。**

**茂呂**　ニセコでは片桐さんが子供たちに粘土で造形するのを教えていただきました。みんな本当にキラキラしててすごく楽しく、縄文文化の入り口に立てたと思っています。

**・・・次の世代たちが触れることによって興味の扉が開く。その扉から自分にとって刺さる、好きでい続けられそうなものに1人でも多く触れていってもらえたらと思いますし、その中から片桐さんや茂呂さんのような担い手、作り手がきっと出てきます。**

**片桐**　恐れ多いですよ本当、もう横入りの横入りですからね。でも縄文と出会えたことは大きいです。粘土にルーツがあるんだなと思いました。縄文は誰が作ったかわからないからフラットに見られる。でも縄文時代にもすごい尊敬されている達人がいて、あの人は違うって言われたら嬉しい、そういうものはなくはないと思うんですけど、芸術作品という考え方はないはずですからね。

縄文時代から守破離じゃないけど、あいつなんか違うなってなったらこっちの方がよくないですか、っていうのが出てきて主流になっていくっていうのは、時代ごとに行われてるわけですよね。縄文は字で残っていないですが、寂しいですけどそれがいいところなんですよね。わからない面白さっていうのがアート全般にあるのかな、ってのは最近思います。わからないことを俺はこう思うっていうのがアートの答えだと思うから、そのわからないことが不安になって、何もできないまま終わっていくのがいつも面白くないと思うんですよね。

やってみて、アレンジして、自分なりに作っていかないと次に進めないのかなとは思います。僕は本当にそれができなくて、連載で毎月締め切りが来て、できないって言っても出さないと原稿が落ちちゃう。それでなんかやってるうちに数が溜まって個展をやった時に、こういう仕事だったんだっていうのを気付かされたってのはありますね。やって継続してっていうのは大きいです。

**茂呂**　わからないまま進むって怖いじゃないですか。だからみんなゴールが設定されていないと進めない。今はそういう価値観ですよね。ただアートは、わからないながらも進んで作って、振り返ったら自分自体のアウトプットしたものに一つの方向性が出てきます。

**片桐**　俳優をやって気づいたことと似ていて、こうなってこう見てほしいっていうのがないとお笑いは受けないんですよね。こういうキャラクターの人が意外なことを言うから面白いみたいなのもあるから、"こういう所でこう見てほしい"っていうのは強かったんですけど、舞台や映画とかドラマとかやる時に、こういうつもりで演じてるんだけど、こういう部分がいいねって言ってくれるのは自分が意図してなかった部分だったりするんです。もうよくあるんですけど、いろんな人が見て勝手に思ってくれるっていうのは面白いですし、わからないことが出た時に、自分がわかってなかったことに気付かされるのは大切だなと思います。今って調べたら正解が知れるんですけど、でも間違ったまんま進むって、ある種貴重なのかな。

**・・・「好き」は自分の中で解釈、編集することで増幅されていくわけですが、それは自分の中だけではなくて外からの影響もとても多いのですね。**

**茂呂**　和太鼓なんてもう「歴史」、伝承みたいな世界です。私が始めた時「鼓童」がすでに世界でやっていて、3軍とか4軍まであって、果たして自分は鼓童を目指したとして1軍で世界で活躍することが描けるかなと思うとちょっと確証が持てなくて、何かないかなって学生時代ずっとバレーボールやっていたんですよ。結構全国大会も行けるチーム。でも万年補欠だから劣等感はあって、和太鼓で世界を目指してずっとやってたんですね。札幌の姉妹都市に演奏に行けたので海外でも和太鼓で受けるってことがわかっていても、悶々としていた時に西アフリカのジャンベっていう太鼓に出会って、それが19歳ぐらいで。道端で叩いているのに出会って、音を聞いた時に、低音と高音が1個の楽器にあって、なんて豊かな音がするんだろう……一目惚れしちゃったんですよね。そこから本場のガーナに行こうって。

**片桐**　すごい。その行動力です。

**茂呂**　もうそこが分岐点で、そこに未来を描けたんですよね。やっぱりワクワクすることが描けないと、好きを増幅させられないし、自分自体が楽しくない。ガーナでは首都のアクラから1時間ぐらい車で移動した町にある部族・ガ族に迎えられ、私が行った時は50人ぐらいのコミュニティーでした。同じリズムを半年間やらされたんですよ。みんないろんなリズムをやっていて、ビデオカメラを許可を得て回しながら録音して、後から見返してもその音が出ないんですよ、いくらやっても。最低限の叩き方が体に入ってないから出ないんだと思う。だから「次のリズムやってもどうせできないんだからこのリズムを徹底的にやれ」って言われて、できるようになるまで半年かかりました。

**片桐**　もう嫌だよとはならないんですか。

**茂呂**　ならなかったです。8時間毎日マンツーマン。もう本当に太鼓のことしか考えないで。本当は3年ぐらいいたかったんですけど、1年目でなんか見えたんですね。いろんなリズムを学んでも、結局向こうでは団体で構成しパートに別れる。帰っても私1人じゃないかと。

**片桐**　戻って、じゃあ日本から北海道から発信するものとはということから縄文に行ったんですね。縄文に出会うまでどれくらいだったのですか。

**茂呂**　結構かかりました。日本に帰ってジャンベ奏者としてやっていた時も和のリズムをジャンベでやるっていう現代的な手法をやっていたら、いろんな現代アーティストや舞台関係の方達に世界でそれをやってるのは君だけだよ、ジャンベで和のリズムを叩けるのは武器だねって言って、声がかかったんですね。でも一流の方々で共演したり世界的なコンテンポラリーダンサーと一緒にやったりするのは10年かかって。

また、ジャンベを作るにも風土が違う。北海道では硬くて太い木がなかなか入手できなくて、気候が違うと、作れるものは違う、素材が違う、出る音も違う。コンセプトも含めて発信できるものをと思っていた時、札幌大学名誉教授で詩人の原子修(はらこ・おさむ)先生から「あなたの太鼓の音は縄文の音がする」って言っていただいてから、縄文文化への入り口が開いたんです。

**片桐**　風土や部族の考え方とか、縄文に合いそうですよね。

## 「こうあるべきだ」の向こう側に見つけたもの

**・・・片桐さんが影響を受けた方や忘れられない経験はありますか。**

**片桐**　相方(小林賢太郎さん)には、多大な影響を受けました。全部作・演出だったんで。あんなにセルフプロデュースを考える人は当時いなかった。先を見据えて、これはこう見えるかなっていうのをずっと考えてる人でしたね。未だにあんな変な人見ないっていうぐらいすごいなって思います。

造形ではフィギュア作家の竹谷隆之さんが大好きで、北海道出身で、お父さんは漁師で、その原体験をもとにした「漁師の角度」っていうオリジナルストーリーを書いてそのジオラマを作っています。それがすごい面白くて、北海道以外に人がいなくなっちゃった近未来な話なんだけど、その漁師が強いんですよ。ミュータントみたいなのを倒したりとかする。もうオリジナルすぎてなんとも言えないんですけど、造形がすごくて。その人の真似で粘土やヘラを使ったりして。彫刻家の影響を受けた人はいっぱいいるんですけど、現代彫刻

**こういう部分がいいねって言ってくれるのは自分が意図してなかった部分だったりするんです。いろんな人が見て勝手に思ってくれるっていうのは面白いですし、わからないことが出た時に、自分がわかってなかったことに気付かされるのは大切だなと思います。今って調べたら正解が知れるんですけど、でも間違ったまんま進むって、ある種貴重なのかな。**（片桐）

**守って、その型を破って、そこから新しい展開をする。継続するために周りが理解してくれる哲学的なもの、ここは違うんだっていうコンセプトワークが必要になる。環境も含めて縄文自体にもこういう造形美があったってことは、そういうことをちゃんとやっている。**（茂呂）

家は「工作者」になってくるから、頭でっかちというか。
**茂呂**　片桐さんの作品を拝見させていただいて、内から出るエネルギーってすごくありますよね。
**片桐**　守破離の逆でとにかくオリジナリティのあるものを作らなきゃいけないっていう強迫観念、コンプレックスがすごかった。美術予備校で理詰めで教えてもらって、いざ美大に行ったら、それ使えませんよって言われる。自分の限界を超えていくルーティンみたいなものを作ってむちゃくちゃ難しいことをやるわけなんですけど、たった4年でできるわけなくて、焦って手が動かなくなってきちゃって、描けなくなってみたいな。その時に立体だったら、物としてある力、存在感の面白さみたいなのも絵よりあるなあと思って。習ってないから、こうじゃなきゃいけないっていう縛りが少なかったです。
模刻っていう、まねして彫ることをやりました。火焔型土器と土偶の模刻は、筋肉や骨格の流れとかっていう勉強してきたルールが全部使えない。なんで分厚いのとか、なぜこうなのとか全然わからないんですよね。とにかく観察したし写真とか本物も見たりしてたんですけど、すごく貴重な体験でした。自分が思っている「こうあるべきだ」って世界がどんだけ狭かったんだろうっていう。
**・・・お二方が出会った人と経験から、それぞれの価値観に変化があったんですね。**
**片桐**　例えば茂呂さんは大学の先生に縄文の音だって言われて、そこから縄文土器で太鼓を作ろうってなったきっかけはなんですか。
**茂呂**　「作れ」って言われたんです(笑)「あなたが縄文の太鼓を作って縄文文化を世界に発信しなさい!」と
**・・・なるほど、まさに片桐さんもお作りになったのと同じですね。**
**片桐**　焼き物の経験はあったんですか。
**茂呂**　全くないです。アフリカで木に太鼓の革を張る技術は学んできて、ボディがあれば間に合うなと思って……。そうして地元の江別の郷土資料館に行ったら、縄文土器がズラーッと並んでいて、太鼓になりそうなものを見つけたんです。これだったら太鼓になっても大丈夫で音も出そうだなと思って学芸員の方に言ったら、復元の専門家、江別土器の会(当時代表:千田幸子先生)の方が作った土器を太鼓にしてくださいと分けてくれたんです。
**片桐**　縄文太鼓作家って、茂呂さんだけですか。
**茂呂**　縄文太鼓演奏家のメンバーもみんな作っています。
そうして縄文文化の普及活動をやっていると、出会う人たちがいい意味で正解のないものに挑んでいる。考古学者の方たちもすごくロマンティストが多くて、生涯かけてロマンを追いかけて夢や希望を持っている人たちで、しかもアーティスト志向ですよね。
**片桐**　そこなんですよ。考古学者や学芸員の先生に会うと、もう目の前のただの原っぱに縄文時代の遺跡のことが見えてるんですよ。すごいっすよね、こういう大人の人たちが。
**茂呂**　しかも、日本って行政に勤めてる考古学者や学芸員が世界的にみても、とても多いみたいですよね。
**片桐**　だから郷土資料館がこんなにあるんですね。もったいないなあ、面白いものがそこにいっぱいあるのに。
**茂呂**　その研究の成果物や、土器や土偶などの遺物から着想を得て、観光資源化じゃないけど、アーティストやエンターテイナーたちがもっとその成果をもっと形にするといいですよね。
文化人類学者のレヴィ=ストロースが「世界は人間なしに始まったし、人間なしに終わるだろう」という言葉を残されていて、今の人間の思い上がりを静かにしかし決然と戒める、そういう簡潔な言葉は今までなかったって学者の先生たちが言っているのです。アイヌの偉大な音楽家の方も同じ意味合いのことを言っていて、「地球に人間がいなくても、地球は何も困らない」と。同じ意味合いなんですね。縄文文化を楽しく発信することももちろん大事だけれども、根本にある考え方をどう広げていくか。わかる人にわかればいいっていう考え方もあろうかと思うんですけど、ここがアーティスト・表現者に今委ねられている課題なんじゃないかなって思います。

## そして、「縄文」に魅せられて

**・・・最後に、縄文や縄文文化の中で、概念とかこういうものとか、とにかくこれが一番好き、というものはなんでしょうか。**
**片桐**　土偶ですかね。いろいろな使われ方があるんだなって最近思うようになったんですけど、やっぱりあのキャラクターの力がすごいなと思って。多分日本のキャラクター大好き文化と結びつくんじゃないかと思うんで、きっかけにしてほしいです。あとは本物を見てほしいですね。
**茂呂**　縄文イコール「希望」です。これからどこに向かうのか、例えば資源枯渇、ポスト資本主義とか言われている中で結局お手本がないからみんな進めない、目標がない、私たちは今100年後さえ描けないし、今年の終わりでさえもわからないです。だから、1万年も争わないで生きてきた自分たちの先祖の血が私達に入っている、なんかそれだけでも希望になるんじゃないかなと思っていて。
**片桐**　そう思います。
**・・・土偶、そして希望。二つがハーモニーを奏でているように思いました。もしかしたら今以上に気候変動や海面上昇が起こり、天気予報もなかった中で、太古の人々もきっと希望を託していたような気がします。**
**お二方の縄文を超えたところでも、まさに今日の「守破離」のように一言で表現できるような「好き」との向き合い方・つながり方・愛し方、そして過去・現在・未来・希望……そういったものを縦横無尽に聞かせていただきました。本当にエキサイティングな時間でした。**
**片桐**　文字起こし大変ですよね、時系列めちゃくちゃ喋っちゃったから(笑)　■

(2021年1月22日 東京にて)
＊当日は安心できる環境を充分に確保した上で対談を実施しました。ご協力いただいた皆さま、ありがとうございました。

「茂呂剛伸後援会会報」で毎号お届けしてきましたインタヴューを、リニューアルした「JOMON」では増ページとともに『それ、[縄文]だよね』というキーワードとともにお送りしてまいります。さまざまな分野で活動されている中で縄文文化とのつながりをお持ちの方をお迎えし、時には想像もつかないようなジャンルからの縄文文化へのアプローチとなるような出会いのきっかけをお楽しみいただけたらと思います。

# 縄文太鼓の2020年

## 茂呂剛伸

### ショートムービー「縄文太鼓」完成 6月

映画「縄文にハマる人々」で知られる山岡信貴監督が制作してくださったショートムービーが公開されました。
2019年の「JOMON+ART village in Niseko 2019」に合わせ、北海道の大自然の中での縄文太鼓の演奏とともに、茂呂がこれまでに考え、形にしてきたことと、これからの展望を語ります。茂呂のウェブサイトからもリンクしていますので、ぜひご覧ください。

### 8月 中村キース・ヘリング美術館にて演奏（山梨県）

後援会会報vol.9でインタヴューにご登場いただいた中村和男さんが館長を務める「中村キース・ヘリング美術館」での演奏会を行いました。この空間の作品達との対話は本当に刺激的で、活動のエネルギーを沢山充電出来ました。素晴らしい出会いにも恵まれ、サッカー指導者"ヤスさん"こと三浦泰年さんにも、演奏をお褒め頂き光栄でした。
なお今年7月17日～9月26日に、札幌芸術の森美術館にて同館の所蔵作品が公開されますので、ご期待ください。

### 7・8・9月 北海道立近代美術館 演奏会・ワークショップ

ジャンベ・縄文太鼓を一緒に演奏するワークショップと演奏会をシリーズで開催しました。
当初の日程から延期となりましたが、講堂の大空間を会場に衛生対策を徹底した上で開催にこぎ着け、多くの皆さまにご参加いただきました。
一緒に太鼓を叩く、セッションすることの楽しさを私も改めて体感しています。今後もこのような場をひとつひとつご一緒に作りたいと思います。

### 8月 中学生たちとのセッション（芦別市立啓成中学校）

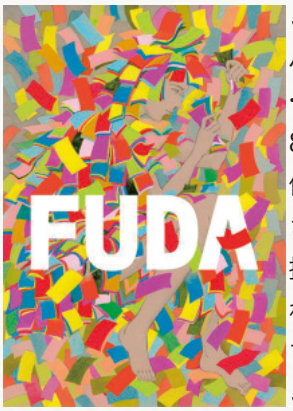
中学校の特別授業の講師としてお招きいただきました。
師範の石田しろさんとともに、熱意と好奇心を持ち続けて行くことの大切さをお話しし、生徒の皆さんと縄文太鼓をご一緒に演奏。リズムの飲み込みも速く、体育館は笑顔と熱気に包まれました。

**2020年。全く予想もできなかった世界的疫病の蔓延という社会状況の中で縄文芸術文化財団は船出しましたが、変わらない想いとともに積極的な活動を展開しました。メンバーの昨年の活動からいくつかご紹介いたします。これからの活動にも、お力添えをいただけましたら幸いです。**

## 9月 紅櫻公園アートフェスタ（札幌市）

市街地のすぐ側に広がる広大な森を舞台にしたアートイベントでのパフォーマンスでした。菅野優斗さんの津軽三味線、「神雅氣」（高谷秀司さん・小川紗綾佳さん）のギター、ピアノとのセッションもあり、最後には会場の皆さまとダンス。肌寒い中大変な盛り上がりとなりました。

## 9月 配信公演「FUDA」開催




この困難な状況下でも私たちのパフォーマンスをお届けしたい…。総キャスト40名、制作期間8ヶ月をかけ制作した作品を映像配信で公演しました。橘春香さんの脚本は普遍的なテーマを描きながら、続く疫病禍の中、これから変わっていくであろう私たちの生き方を一緒に考えていくことを語りかけ、そこに集った多才かつ多彩なアーティストの力を結集して生まれた本作が、さまざまなバリアを超えて北海道から発信していく新たな舞台芸術のきっかけとなることを願っています。

現在全編を無料でご覧いただけます▶

## 11月 釧路湿原・北斗遺跡 グランピングで演奏

釧路湿原内にある北斗遺跡の活用を目指し、環境省・文化庁・釧路市埋蔵文化財調査センターなど関係機関の許可を得て国立公園内史跡でのグランピング（キャンプ）を国内初試行しました。悠久の歴史をさらに体感し共感できるよう、今後も協力をさらに積み重ねていきます。

（紙面は毎日新聞社使用許諾済）紙面の拡大を掲載しています▶

釧路湿原・史跡で
グランピングを
北斗遺跡 特別な許可得て実現

2020年
12月10日付
毎日新聞

## 今後のイベント

●状況により変更の場合があります。最新の情報は茂呂のウェブサイト・Facebookにて。

### 土祭（ヒジサイ）2021（栃木県益子町）

益子焼で名高い栃木県益子（ましこ）町で三年に一度開催されている、「日常」の中の表現の営みを大切に分かち合う祭り。5月23日には縄文太鼓を作るワークショップを、10月17日日には茂呂剛伸、石田しろさん、石橋俊一さん、川村怜子さん、佐藤夕香さんの出演による演奏を、小宅（おやけ）古墳群を舞台に開催します。

古くから人と土が深く結ばれてきた益子の地で、どのように「古」と「今」が交差するでしょうか。ぜひ足をお運びください。

# 石田しろ

**石田さんは北海道、そしてアイヌの文化と人々との関わりを通した、「今」だからこそのパフォーマンスに数多く取り組みました。**

## 4月

### パヨカカムイエピル
（弟子屈町 屈斜路湖）

その昔のアイヌの人々には、パヨカカムイ（旅をする病気の神様。疫病）と向き合う精神世界があります。つまり、パヨカカムイも人間もこの地球上で生きていく権利があることを認め、互いに上手につき合うという共存の知恵があります。時には「これ以上、人間をいじめないでほしい」と祈り、お祓い（エピル）をすることもあります。アトゥイ氏のアイヌ文化の師匠である故・山本多助氏の話によると“このような儀式は数十年に一回あるか、ないか”の儀式だそうです。
疫病の収束を願って行われたこの儀式に参加し、太鼓を叩かせていただきました。

## 9月

### 第21回 絶滅種鎮魂祭
（弟子屈町 屈斜路湖）

『地球に人類がいなくても何も困らない』『それでも、他の動植物に地球上にいてもいいよと言われるようになりたい』……。
人間も動物のひとつ、自然の中のひとつという考えのもと、地球上に人類がいたことにより絶滅してしまった動植物への反省と祈りをする場として、全員を”参列者”と位置付けて継続されている祭典での演奏です。
屈斜路の地だけでなく、世界に宗教・思想の垣根を越えて広がることを願っています。

## 12月 KOM_Iさん（水曜日のカンパネラ）との共演

ウェブ上のテレビ局Ameba TVの番組「ONE LIVE」で、「水曜日のカンパネラ」のボーカルとして、国内だけでなく世界中の音楽フェスに出演、ツアーを廻り、その土地や人々と呼応しながらライブパフォーマンスを創り上げるKOM_I（コムアイ）さんが来道。アイヌ文化の伝承と発信をする「スズサップノ良子」さんとのご縁から、アイヌの精神世界を胸に、一夜限りのパフォーマンスに挑みました。素晴らしい出会いをいただきました。

佐藤さんはさまざまな舞台での演奏に参加し、
多彩なジャンルのアーティストの皆さんと研鑽を積み、表現の幅を広げました。

# 佐藤夕香

## 8月 Sapporo Dance Collective 2020 さっぽろ文庫101巻「声」

札幌の風土の中で生まれ育った芸術、文化、社会、自然を広く紹介してきた書籍シリーズ「さっぽろ文庫」(昭和52年～平成14年に100巻を刊行)からインスパイアを受け、その101巻目として、2020年現在の「声」をダンス作品化した作品に演奏で参加しました。本作は札幌市の芸術文化活動継続支援の一環として映像配信を実施しました。

## 10月 タップダンスとの共演

タップダンサーの吉田つぶらさんとのデュオライブを開催しました。タップとジャンベ、いわば「打楽器」だけでの音のセッションを作り上げ、お楽しみいただきました。

## 1月 2021 舞台「残像百景」

音楽家の景井雅之さんの演出・構成によるパフォーマンス集団「桃源郷オーケストラ」の舞台公演に参加。
当日はチケットも完売し、幻想的な舞台をお楽しみいただきました。

## 2月 2021 舞台「だからわたしは庭へ飛び出した」

佐藤さんが企画・構成・演出とともにジャンベ・縄文太鼓を担当し、サックスに鳥一匹さん、キーボードとシンセサイザーに佐々木あおいさん、ライブペインティングに橘春香さんをお迎えしました。即興のセッションも飛び出して、空間で練り上げてゆくパフォーマンスをご一緒に作ることができました。

# JŌMON Topics

## 「一般財団法人 縄文芸術文化財団」について
### －「縄文」のさらなる発信を通じ、地域と芸術文化の発展に貢献を続けます－

私共は「縄文太鼓」を核に、縄文文化のさらなる発信を目指し、予てから財団法人の設立に向けた準備を行ってまいりましたが、去る2019年10月1日、「一般財団法人　縄文芸術文化財団」の設立認証をいただき、登記いたしました。
これまで「株式会社オフィスモロ」と「茂呂剛伸後援会」が行ってきた活動を2020年より財団に移行・統合しており、縄文太鼓の制作・演奏・指導に関する一切の活動や門下メンバーのマネジメントを行うとともに、長きにわたり培ってまいりました人的・地域間のつながりをより強め、全国、世界に発信し得る芸術文化としての『縄文』への共感の環を広げてまいります。
まもなく開催される世界遺産委員会において、私共も念願してまいりました「北海道・北東北の縄文遺跡群」の世界文化遺産への登録の審議が行われ、登録の機運がますます高まっております。
今後も活動の幅をさらに広げ、公益財団法人への移行も視野に、縄文文化の発信と高揚に一同邁進してまいります。
皆さまの変わらぬご支援を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

縄文芸術文化財団

財団のロゴマークは、北海道を代表するデザインユニット「ワビサビ」が手がけてくださいました。
土器のフォルムで[JOMON][JAPAN]の頭文字「J」を形作り、縄文芸術の全国へ、世界への広がりを表現しています。
私共の新しいシンボル、どうぞよろしくお願いいたします！

**役員一覧**
**理事長**　横内龍三　**業務執行代表理事**　茂呂剛伸
**理事**　横内龍三、石森秀三、茂呂剛伸、石田貴保　**監事**　寺田昌人　**評議員**　荒川裕生、戎谷侑男、横井隆、堂守貴志、斉藤博之

## 会員募集のご案内

時を越え、現代に生きる人々のこれからへのヒントを提示してくれる、縄文文化。私たちは「縄文の響きを未来へ」というこの思いをより多くの人々に伝えていく活動を、たくさんの皆さまとご一緒に広げたいと思っております。
当財団の会員になっていただきますと、本会報のお届けやイベント・演奏会へのご案内を差し上げております。
皆さまのご入会を心よりお待ちいたしておりますとともに、お知り合いの方にも、ぜひご紹介くださいましたら幸いです。

**インターネットで**
https://www.jomonart.or.jp/join/
お申し込みフォームをご用意しています
メールでも承ります　info@jomonart.or.jp

**お電話・FAXで**
電話　011-200-2112
FAX　011-200-2113
縄文芸術文化財団ご入会の件とお申し付けください

[JOMON] 縄文芸術文化財団 ニュース&ボイス 第1号（通巻10号）
2021年7月31日発行

発行者　一般財団法人 縄文芸術文化財団 事務局
発行所　一般財団法人 縄文芸術文化財団
064-0804
札幌市中央区南4条西1丁目15-2 栗林ビル7階
TEL 011-200-2112
FAX 011-200-2113
info@jomonart.or.jp
www.goshinmoro.com

UD FONT ユニバーサルデザイン(UD)の考えに基づいた見やすいデザインの文字を採用しています。

デザイン ウリュウ ユウキ（ウリュウ ユウキ 制作室[madokara]）
© Jomon Art and Culture Foundation 2021 | Printed in Japan